

阿波國 すきま 漫遊記

VOL.1 小さな城

[取材・文・写真] 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開発・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>



■阿波市吉野町柿原

モルタルで精巧に作られたシャチホコがかわいい。軒の裏側にみえる櫛の歯状の材(垂木:たるき)まで、モルタルで作ってあるのがすごい。

はつる

関東で生まれ育った私が、転職で徳島に引っ越して来てから6年になる。いわゆる「ターニングポイント」だと思えてしまうものだ。ところが他所から来た者にとっては、生粋の阿波っ子にはありふれて見える風景が、日常の「すきま」にひそむカルチャーギャップ的な物件に焦点を当てて紹介しようと思う。その第一回として、道ばたにある小さな城を紹介してみたい。

「住めば都」という諺があるが、その土地に長く住んでみると、自分の身の回りにもあるものが世の中の標準だと思えてしまうものだ。ところが他所から来た者にとっては、生粋の阿波っ子にはありふれて見える風景が、日常の「すきま」にひそむカルチャーギャップ的な物件に焦点を当てて紹介しようと思う。その第一回として、道ばたにある小さな城を紹介してみたい。

眉山城

眉山のふもと、佐古一番町。私が「ハギレ横丁」と呼ぶ一角にその城は建っている。高さは1・5mほどでモルタル造。4層の小天守、3層の小天守、隅櫓からなる山城形式の城だ。これを築城したのは、近くにあった銭湯のご主人



▲眉山城・小天守

威風堂々たる城だ。こうして見るとミニチュアとは思えない迫力。



▲眉山城・三重塔

なぜか城内に三重塔が建っている。これはあとから移築されたものかも知れない。



▲眉山城・小天守の欄干

欄干の擬宝珠や風鐸まで再現してある。ただし欄干の内側に破風がある造りはちょっと不自然だ。

なのだという。城だけでなくお寺も好きだったようで、近くの藪をよく探すと氏が建立したとおぼしき寺院や鐘つき堂も見つかる。さらにお宅の庭には日光東照宮の陽明門が建っている。



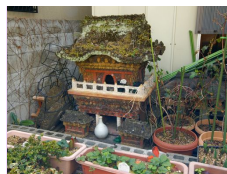
▲眉山城・遠景

城は道沿道に面している。何十年もこの場所でお通路さんを見守り続けてきたのだろう。



▲眉山城・謎の廃寺

眉山城近くの藪を探すと、いくつもお宅が見つかる。



▲眉山城・陽明門

もと銭湯だったという城主のお宅にある。日光東照宮の陽明門のミニチュア。これは力作だ。

柿原城

次に紹介するのは、阿波市吉野町柿原の街道沿いにある城。城の前には石碑があつて道からは気付きにくい。緑色の瓦に真つ赤な軒という道教寺院のようなカラーリングは鮮烈だ。天守台の下部は盛り土になっているので、平山城形式としておこう。この城の特徴は屋根の裏側の垂木たるきが作り込みであることだ。吉野川市や石井町の神社を巡ると、とても精巧に出来たモル



▲柿原城・全景

石碑の後ろにあるため、気付きにくい。右側の垣根の上に小天守の屋根が見える。

タル造の末社を見かけることがあるが、この城のディテールはほとんどなく神社の小祠を思わせる。

浦山城

最後に紹介するのは、つるぎ町貞光浦山の農家の倉庫の横にある城だ。築城したのは上板町に住む人で、この農家のご主人の従兄弟にあたる人だという。この城のモデルはおそらく大阪城ではないかと思う。典型的な平城である。5層の壮大な天守閣で3層から4層へ貫く大きな千鳥破風が特徴的だ。



▲浦山城・大天守

天守台の石垣が丹念に作られている。巨大千鳥破風と、2連の千鳥破風は大敵城を思わせる。



▲浦山城・小天守

造形は小天守のほうが精巧だ。後から作ったのだろうか。大棟や下り棟の瓦のリリアティがすごい。



▲眉山城小天守

メンテナンスを怠ると、城の中から植物が生えてくるというアクシデントも発生。

ところで、今回紹介した3つの城の写真を見ると、ある共通点に気がつく。作者も造形スタイルも異なるのに、どの城も小天守を備えているのである。作者たちは天守閣だけの城にはリアリティがないと考えたのだろうか。すきま物件観賞の醍醐味は、どうでもいいような共通性の発見による体系化と、どうでもいいような差異にもとづく評価基準の確立にあると言えるのだが、どうやら小天守の存在は小さな城観賞において重要なポイントとなりそうだ。